MARCH 2008

鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会

NEWS LETTER

Documentation No.6

ドキュメンテーション

■ 初めての卒業生を送る

卒業を控え、貸与されていたノートパソコンの返却の手続きをする４年生

卒業生の皆さんにとって、大学に入学してからの４年間は、高校以前と比べても、より多くの友人や教員と巡り合い、様々なことを体験し変化に富んだものだったことでしょう。桜の花は咲いてもまだ肌寒かった４年前の入学式の日が想い出されます。皆さんは、これからの情報化の時代に対応できる人材を養成するために文学部に新設されたドキュメンテーション学科に新学科の一期生として入学されました。

新学科は６名の教員と実習技術員との７名でスタートしました。しかし、新学科ということもあり、岡田学科主任以外の教員・技術員は、私も含めて新たに赴任したばかりで、初年度は皆さんの状況を見極めながら、手探りの状況で進めてきたところもありました。

新学科では１年次に授業とは別に、ノートパソコンの補習を実施し、すべての学生がコンピュータに親しめるような工夫をしました。そのことで、１年生の授業を担当していない教員も補習には参加し、皆さんとの交流が深まったのではないかと思います。また、講演会、デジタルライブラリー国際セミナーあるいは交流会などを通じて、授業以外で学生の皆さんが広く学ぶ機会を増やすようにも努めました。

翌年には教員と実習技術員がそれぞれ新たに１名づつ加わり教育の体制もさらに充実しました。２年生になると、コンピュータの基礎を学ぶ情報基礎演習の授業が毎日のようにあり、ノートパソコンを持って６号館と教室を往復する皆さんの姿をよく見かけるようになり、大変ながらも一生懸命努力している様子がよく伺えました。

３年次の後半には、４年生での卒業論文のためのゼミを選択することで面談やアンケートが行われ、皆さんと教員との関わりも一層深くなったと思います。最後の一年、皆さんは多くの努力を払い真摯に卒業論文に取り組んで完成させました。物事をよく分析し、まとめる力はこれからの仕事の中できっと生かされると確信します。また、同時に卒業後の進路についてよく考え、就職活動にも積極的に向き合ってきたと思います。実際、就職の内定先も業種別で見ると、情報関連企業が約半数を占め、卸・小売業、公務員、金融・保険業、製造業などが続いており、学科の特徴がよく反映されていると言えます。

初めての卒業生を送り出せることは、学科の教員・実習技術員一同の喜びとするところです。皆さんの卒業に際しては、新設学科の一期生として何事も初めてづくしのなかで自身努力・工夫されたことが一番ですが、周りの方々からのバックアップあったことを忘れないようにしてください。

ドキュメンテーション学科主任

長塚 隆 Takashi Nagatsuka

この学科で学んだこと

私がドキュメンテーション学科に入学したときは一期生ということで、わからないことや困ったこともありました。しかし学べたことは豊富で、図書館員の知識とパソコンの技術を身につけることができました。特にパソコン技術は、高校生までパソコンに触れてこなかった私でも十分な知識を得ることができました。そしてこれからドキュメンテーション学科で学ぶ方は、後に手遅れになって後悔してしまわないよう、先輩はもちろん、先生達にもわからないことは積極的に聞くようにしてください。（喜多代 昇）

司書の授業で目録の作り方やレファレンス、など初めて聞くことばかりでとても新鮮でした。特にレファレンスでは、インタビューの大切さ、司書に必要な知識、仕事の大変さなどを知ることができました。就職先は司書に関係する職種ではありませんが、活かせるように工夫したいと思います。偶然にも同じ年にドキュメンテーション学科に入学して、一緒に授業を受けた仲間がいることはとても嬉しいことです。友人や先生など、人とのつながりを大切にしてください。（佐田 友視）

この学科で学べたことは、多くの経験から、私に知識よりも知恵寄りの情報を与え、自身の視野を広げることに大いに役立ちました。例えば、演習科目では情報処理に関して、多方面から学習することができ、専門分野だけでなく、それ以外の技術の向上に繋がりました。また、教授達がインターンシップなどの学外活動にも協力的だったおかげで、実際の社会で働くといった経験を通して、社会人としての第一歩の手助けにもなりました。（安田　恒）

ドキュメンテーション学科では、古典籍の取り扱い方や、分類のしかたなどを学びました。曹洞宗の住職をしていた祖父が勉強のため集めていた古典籍が祖父の没後、家の片隅に積まれたままになっていました。それが忍びないと思ったので、卒論として、祖父の蔵書を整理しました。祖父も喜んでいると思います。（浅見 真衣）

日本の古い書物には、手書きした本と印刷した本があります。特に手書きした本は同じものが二つと無いので、個性があってとても興味深いです。授業では実際に貴重書を扱いながら、取り扱いの大変さ、個性などのデータを取ることの大切さ、崩し字を読むことの楽しさなどを知ることができました。卒業論文にも本の個性を大切にするテーマを選び、崩し字を読んだり、本文と本文を比べたりして楽しく研究できました。後輩のみなさんも自分の興味引かれる分野を見つけて、楽しく学んでください。（畠山　茜）

自分で物事を考えるということ、何に対しても疑問を持つ心を学びました。現在、真偽は別としてインターネットの普及などで様々な情報があらゆる場所にあります。他人に甘えず、自信で調べて探求していく心を大切にしたいと思います。そして、幼少の頃に大切にしていた「何に対しても疑問を持つ」ということ、何に対しても疑問を持ち、調査することで自分自身の教養も深まるということを改めて学びました。（森田 嗣正）

私たちはこの学科の１期生ということで、手探りの状態で１年生がスタートしました。ほかの学科との違いは先輩がいなかったことで、卒業論文を参考にしたりが出来なかったことが挙げられると思います。そのような状況で図書館学とパソコンの知識の両方を学び、私は DD コースを選択しましたが、リファレンスなどに代表される図書館学の知識を得ることができました。この学科で学んだ２つのコースの知識は SE になる私にとって大いに有用であると思います。（木下 真宏）

卒業生の声
私が学んだこと

長塚隆研究室

1624002　浅見　祐子　「情報リテラシー」テキストのＷｅｂ補助教材の作成
1624006　安藤　慶　　日本語検索ポータルサイトの歴史と展望について
1624007　飯野　琴恵　「情報リテラシー」テキストのＷｅｂ補助教材の作成
1624008　石渡　明男　Web2.0 の特徴と今後の方向性
1624009　伊豆　朋子　ゲームソフトの動向
1624011　伊藤　由佳　新しいタイプの電子マネーについて　―非接触 IC カードとクレッジトカードとの比較―
1624016　雲林院麻斗　野球の打撃フォームのデジタル教材化
1624021　長内　健志　ネット書店アマゾンの特徴と 今後の展開
1624025　角田　博之　ネット社会における情報の伝播特性
1624031　木下　真宏　日本の電子書籍の現状と将来
1624040　鈴木　悠平　小売産業における POS システムの現状と今後の発展
1624050　長島　寛明　古典籍説明文からのドメイン知識の抽出と解析
1624056　長谷川直哉　IC タグの普及が個人のプライバシーに及ぼす影響
1624070　安田　恒　　古地図の初期学習者に向けてのマルチメディアを利用した提示方法

岡田靖研究室

1624014　植村　和哉　初心者の学生用デジタル教材開発
1624018　大原　裕貴　一般紙に見る野球人気へのサッカーの影響
1624035　齋藤　崇雄　電子ペーパーは紙やディスプレイを超える存在になるか
1624038　白木　貴之　電子図書館：図書館の変化と諸相
1624060　平賀　正浩　少年犯罪とインターネットの関連性について
1624073　山田　千鶴　分類表の比較（NDC と DC）

原田智子研究室

1624029　喜多代　昇　オンライン書店におけるサービス内容の比較
1624034　小林　沙知　情報検索基礎能力試験の出題傾向と対策
1624036　佐田　友視　レファレンス協同データベースの内容分析と活用
1624047　鶴田　綾子　横浜市内大学図書館コンソーシアムの特色と鶴見大学生の利用状況
1624049　中島　崇泰　都道府県立図書館におけるｅ－メールレファレンス受付様式の調査
1624055　橋本　安菜　藤沢市総合市民図書館と藤沢市の小・中学校図書館との連携および協力体制
1624058　波多野　恵　大学図書館のＷｅｂサイトに掲載されたＱ＆ＡあるいはＦＡＱの分析と傾向
1624062　藤村　靖子　多文化サービス実施図書館におけるサービス内容：浜松市立北図書館と横浜市立都築図書館の比較
1624071　柳原　悠　　朝日新聞の記録メディアによる比較分析
1624074　山田　雄輔　大学図書館における図書館被害の現状と対策：鶴見大学と他大学との比較

堀川貴司研究室

1624001　浅見　真衣　浅見覚堂旧蔵書の研究
1624024　小野寺雅人　共同保存図書館についての研究　―ＮＰＯ共同保存図書館・多摩を中心に―

大矢一志研究室

1624012　井上俊太郎　企画から出版までの過程における紙と電子の比較研究
1624013　岩崎　桂介　ケーブルテレビにおける多チャンネル化の役割
1624026　霞本祐一朗　高校の教科「情報」と「数学」における学習項目の分析と新学習領

伊倉史人研究室

1624015　牛渡　亮子　群書一覧の索引作成と研究
1624023　小野塚佳子　古典籍の表紙の色・文様に関する調査研究
1624028　川島　大輔　嵯峨本と伝嵯峨本の研究
1624048　長塩　諒子　群書類従の協力者　―奥書に見える人名の調査―
1624030　北村　雅美　デジタル時代の古典籍　―大学図書館における貴重資料の電子化動向調査と展望―
1624057　畠山　茜　『後鳥羽院御自歌合』の伝本研究

元木章博研究室

1624003　鯵坂　圭司　大学人文系学部新入生の情報リテラシー教育に関する調査及び提案
1624004　阿瀬　正裕　Web プロキシ変換ソフトの実装と評価
1624017　大沢　悠一　RSS 等のニュースフィードを利用した円滑な情報の送受信について
1624020　荻田　大貴　Web プログラマーのセキュリティ意識を高める教材の開発と評価
1624032　窪　晴之　メールヘッダ改竄によるインターネット詐欺を防止する為の教材作成と評価
1624039　鈴木　拓真　偽装セキュリティツールに関する学習教材の作成と評価
1624042　田中　聡　ハブとスイッチングハブの違いと特徴に関する教材作成と評価
1624043　田中　紘子　仮想マシンソフトの比較と教材化、評価
1624044　田中　優吾　コンピューターデータのバックアップの重要性についての教材化と評価
1624046　田村　洋一　セキュリティゲートウェイの作成と実運用、評価
1624053　野村　昭博　親と子のデジタルデバイドに関する教材作成と評価
1624054　橋本　歩　中高年向け情報リテラシーテキストの改善案と評価
1624067　満田　優　ネットワークを介する情報漏えい防止に関する提案
1624068　森田　嗣正　ウィルス対策に関する知識向上を目的とした教材開発と評価
1624069　森　仁　「ごたく」クイズソフトを使った学習者自身による教材作成と評価
1624076　渡部　裕輔　クリック詐欺に関する教材作成と評価

卒業論文題目

平成 19（2007）年度

「良い仕事」を目指す

兼松　優
Yu Kanematsu

僕がこのドキュメンテーション学科に入学したのは、司書の資格を取るためです。

司書になりたいと思ったのは高校生の時でした。授業の合間にいつも図書室へ行っては本を借りて読んだり、マンガを読んだりして過していました。図書室にはいつも司書教諭の人がいました。その先生は、朝は新聞を読んでいて、お昼になると図書室横の部屋でお茶を飲んでいました。その姿を見て、「これで良いのかな？」と思ったりもしたのですが、同時に「良い仕事だな」ともうらやましく感じられました。後に図書委員になって、先生の仕事を手伝ううちに、見えないところで本を仕入れたり、整理をして配架したりと、実際には大変な仕事であることを理解しました。そういうことを知った上でも、司書教諭の仕事に就きたいと思いました。

司書になろうと思って入学してからもう２年生も終わろうとしています。目指した仕事は競争率が高く、その上教員免許も必要ですので、授業はいっぱいつまっています。３年生になると、コースを選択することになりますが、司書になるにはライブラリーアーカイブコース（ＬＡコース）に進んだ方が良いのかもしれません。しかしながら、レファレンスサービスではインターネットも利用し、いかに依頼者の知りたい情報を的確に探せるかが重要になっています。また、図書の整理では何万冊という図書をデータベースで管理しています。このように現在の図書館ではパソコンが重要なものであると、この一年間授業を受けて知ることが出来ました。ですので、今ではデジタルドキュメンテーションコース（ＤＤコース）に進もうと考えています。

コース選択 悩む／迷う／信じる／決める…

悩み続ける私

大木 奈々絵
Nanae Ohki

私は本を読むのが好きだ。暇さえあれば本屋へ赴き、時を超えてしまったのではないかと思うほど本に没頭してしまっている。

そんな私が最近、というか随分前から考えていることがある。本を一冊読むと、最後に書誌情報が書かれている。それを眺めては、この本が一冊できあがるまでを考え、そして思うのだ。自分もその流れに加わってみたい、と。そうして私は出版関係の仕事に就きたいと思うようになった。

しかし、現在私は悩んでいる。来る大学３年生、コース選択だ。簡単に考えてみると、書物に関係しているＬＡコースかもしれない。でも私は司書の資格を取得しようと考えているものの、図書館学や古典籍にはあまり興味がないのだ。

一方、ＤＤコースだが、私の心は少しこちらに傾いてきている。出版も情報の世界だ。パソコンを扱い、編集などの仕事に役立てたいと思う。でも、ここでまた悩んでしまう。いやいや、本に携わる仕事に就きたいと思っているんだから、書物についてひとつでも多く勉強できるＬＡコースに進むべきでは…。

そうやって堂々巡りの悩みを抱えつつ、私は３年生を迎えようとしている。それでも選択の時、自分の納得のいく答を出せるよう、これからも悩み続けてみることにする。

古典籍に触れるために

渡辺 はるか
Haruka Watanabe

将来は実家のお寺を継ぎたい、と小さな頃からずっと思っていた。そのために曹洞宗のことを学ぼうと鶴見大学に進路を決めた。

高校３年生の時、情報コースにいたこともあり、オープンキャンパスではドキュメンテーション学科の模擬授業に参加した。そこで、古典籍がデジタル化され、くずし字で書かれた文章をクリックするとその部分の翻刻が表示されるというホームページを見て感動した。私がＬＡコースを選択しようと決めたのは、その時の体験が大きく影響しているように思う。

実家の物置の中には多くの古典籍が保管されている。保管というか、ただ置いてあると言った方が正しいかもしれない。私は本が好きで、その古典籍をそのまま腐らせていくのは勿体ないし、嫌だな、と思っていたので、模擬授業で見たシステムは私に「これだ！」と思わせてくれた。

ＬＡコースに進んだからといって、古典籍の文章をクリックしたら翻刻された文章が出てくるなんていう高レベルの技術が学べるかはわからないけれど、古典籍を学ぶ、古典籍に触れるということは、実家にある古典籍をしっかりと、大切に保管することに繋がると思うのだ。

この１年、図書館や古典籍に関する授業を履修して、初めて知ったことが多い。というか、初めて知ったことだらけだ。来年からはもっと専門的なことを勉強するようになるだろう、それが不安でもあり、楽しみにでもある。

学生の声・２年生

興味を将来につなげる

森田 貴之
Takayuki Morita

この学科に入り、古典籍に興味を持ったので、３年生になったらＬＡコースへ進みたいと考えている。

私は将来何をしたいかが未だに決まっていない。しかし、大学では何か目標を立てて勉強をしたいと思っていた。だからＬＡコースへ進んだら、まずは古典籍（くずし字）が読めるようになりたい。

どうして古典籍に興味を抱いたかと言えば、前期の「古典籍読解演習Ｉ」を受けたからだ。くずし字を読む授業だ。最初は文字とは思えず、なかなか読むことができなかったが、少しずつ読めるよになり、あたかも暗号を解読するようで面白く感じるようになっきた。

仮名には字母というもとになった漢字があることや、今は使われていない字母の仮名もあると知り驚いた。それと同時に好奇心も涌いてきた。

くずし字以外にも古典籍の装訂についても知りたいと思う。それと表紙や料紙の装飾や文様なども知りたい。現代の書物以上に装飾が凝っていたりするのはなぜか、とても興味深い。私は美術にも関心を持っているのでそうしたことは特に学びたいと思うのだ。

私はもともとＤＤコースに進むつもりだったので、ＬＡコースに進むには基礎的なことを勉強しておく必要がある。授業だけでなく、自分で学ぶことも大事だ。興味を持ったことを、将来に役立てることができるようにしていきたい。

マークアップ言語のグリーナ

Gleaners of Markup Languages

大矢 一志
Kazushi Ohya

No.2　マークアップ言語の誕生

厄介なことに，解説本の中でマークアップ言語は，「マークアップする」「タグ付けする」「要素を示す」「エレメントを書く」「メタ記述する」ための言語，と書かれています．これでは，初心者がくじけてしまうのも頷けます．そもそも，マークアップ言語 (Markup Languages) の「マークアップ」とは何でしょう．

「マークアップ (markup)」は，編集者が「校正記号 (marks)」を「付ける (mark up)」ことから派生した言葉です．校正記号とは，例えば

図1

只今，留守にしていません．

の様に，原稿にある間違いを正したり，レイアウトを指定したりする記号のことです．「マークアップ」を付ける行為も「markup(マークアップする)」といいます．この語源からも分かるように，マークアップ言語の誕生は，印刷や編集の電子化と深く関連しています．今回は，この誕生の歴史を紹介します．

もともと「コンピュータ」は「計算する人 (compute+er)」のことですが，機械式計算機 (calculators) が登場すると，計算機が人 (computers) に代わって数値計算を行うようになりました．しかし，次の世代に作られた電気式計算機 (今でいう computers) は，その登場と同時に，数値計算以外の役割を担うことになります．資料の電子化です．1951 年に R. ブサ神父は聖書の電子化を行いました．これはまだ電気式計算機が生まれたばかりの時代です．資料の電子化，つまりテキストの入力・編集は，コンピュータが誕生と共に切り拓いた分野なのです．その後，電子式計算機が作られると，性能は急激に向上し，大規模なシステムが作られてゆきます．そこで課題となったのが，プログラム開発を如何に効率よく行うかという問題です．この時から，プログラムなどのテキストを編集する (書く) こと，出来上がったテキストを見やすく出力することへの挑戦が始まります．すなわち，編集と印刷の電子化です．1960 年代半ばのことです．1964 年に MIT から RUNOFF というフォーマタ (formatter; 書式付けソフト) が生まれます．1965 年に Stanford 大学から TVEDIT というエディタが生まれます．その後これらの研究は，プログラム開発環境など，幾つかの分野に枝分かれします．マークアップ言語は，その中の，印刷の電子化の流れの中で誕生することになります．

RUNOFF というフォーマタは，以下のように

図2

```
.center
要旨
.space 1
.indent 2
この文章は , マークアップ言語の発生系統を解説したものです .
```

書式 (レイアウト) を指定する「.center」や「.indent」という命令を，対象となるテキストの前に埋め込み，これらを入力すると図 3 のような出力が得られるものでした．

図3

要旨

この文章は , マークアップ言語の発生系統を解説したものです .

少し難しいですが，HTML と比べてみると，幾つかの違いが分かります．1) タグの部分が指定されていない (1 行全部), 2)(対象) 範囲が指定されていない, 3) 属性がないことです．これは, a) テキストデータは行からできている, b) マークアップにはひとつの (出力) 処理が定義づけられていることが，その背景にあります (詳細は別の機会にしましょう)．このような，処理命令と強く結びついたマークアップを，「手続き的マークアップ (procedural markup)」といいます．この意味では, HTML も手続き的マークアップといえます．画面出力に特化したマークアップ言語です．

その後，幾つかの有名なフォーマタが誕生します．1971 年に Stanford 大学から PUB というフォーマタが生まれます．これは，範囲指定が可能で，抽象単位 (e.g. 段，節，脚注など) を扱うことができました．1970 年代後期には，Carnegie-Mellon 大学から Scribe というフォーマタが ,Stanford 大学から TeX というフォーマタが生まれます．そして，1970 年代には IBM から GML(Generalized Markup Language) というマークアップ言語が生まれます．この GML は，1) タグの部分，2)(木) 構造，3) 属性を持つことができました．例えば，次のような記述ができます．

図4

```
:school id=u1.
:title yomi= つるみだいがく . 鶴見大学 ::title.
::school.
```

これを XML で書き換えれば下図のようになります．比べてみて下さい．

図5

```
<school id="u1">
<title yomi=" つるみだいがく "> 鶴見大学 </title>
</school>
```

木構造に対応したエディタには 1971 年の Emily がありますが，木構造に対応したマークアップ言語はこれが最初ではないでしょうか．また，この GML は，更に画期的な提案をしています．マークアップを処理命令から独立させようというのです．その結果，マークアップの意味は自由に設定できるようになります．このようなマークアップを「記述的マークアップ (descriptive markup)」といいます．SGML や XML は記述的マークアップです．記述的マークアップの特徴は, 1) 自分でマークアップの意味を定義できることに加えて, 2) 別のマークアップ言語を定義できる，という重要な機能を持つことです．この機能を「メタ記述」といいます．XML がメタ言語と呼ばれるのは，a) タグの部分と，b) 別のマークアップ言語を定義できるメタ記述の機能を意味したものです．

さて，最後に残りの言葉を解説して，今回は終わりにしましょう (GML 以降の歴史は，授業で紹介します)．SGML/XML では，「要素 (エレメント , element)」を次のように定義しています．

図6

「要素」＝「開始タグ」＋「内容」＋「終了タグ」

例えば，図 5 にある「<title>」は開始タグ，「鶴見大学」は内容，そして「</title>」は終了タグです．「<title>」は，マークアップであり，タグであり，要素を示すメタ記述部分になります．

目録の歴史に驚く

櫛間 麻未
Mami Kushima

大学に入学してから、もうすぐ一年。この一年間は長いようでとても短かったと思います。毎日、時間があわただしく過ぎていくばかりでしたが、それでも、充実していました。今では、時計ばかりを気にして苦痛だった９０分の授業時間も慣れ、真剣に授業を受けることができるようになりました。

入学当初、私はドキュメンテーション学科の授業についていくことができるか心配でした。だけど、授業では順を追ってゆっくり説明してくれます。

わたしはこれから、図書館司書になるための勉強をしたいと考えています。鶴見大学に入学したのも司書になるための勉強ができるからです。

特に今は授業で学んだ目録や、分類に興味があります。現存するもっとも古いとされる目録はＢＣ７世紀ニネベの粘土版が一番古いとされています。授業で初めて聞いたとき、目録がこんなにも昔から存在したことに驚かされました。今ではコンピュータ技術も進み、目録も紙目録だけでなく電子目録も利用されています。古い時代に目録が作られたことは、今のわたしたちにとても役立っている存在だと実感できました。

また、去年はあまり利用せずに終わった大学図書館も利用したいです。なぜなら『図書館には毎日いって、行けるところは見てまわれ』と授業で耳にタコができるほど言われたにもかかわらず、あまり利用しなかったからです。鶴見大学図書館は貴重書を数多く所有している、充実した図書館なので、このまま利用せずに終わるのはもったいないことだと思います。なので、今年はもっと図書館のことを学び活用していきたいと考えています。

大学生活の４年間が充実して、自分自身の身につくようなことをこれからも真剣に学んでいきたいです。

BOOK REVIEW

井上　真琴『図書館に訊け！』　（ちくま新書 486　2004 年）

著者の井上氏は同志社大学図書館の現役図書館員で、現場で出合った事例に基づく非常に実践的な活動を具体的に記述されています。図書館で一体、何をどこまで調べ尽くすことができるか！？

『レポートや論文を書くには、先行研究を調査して現在の立脚点を把握し、必要な文献資料をリストアップすること、関連する背景情報や基礎事項のメモを作成すること、が求められる』 という言葉は、学生生活を上手に過ごす上で、その道筋を示しています。　（元木章博）

＊鶴見大学図書館の請求記号は 015/I（開架・一般）

一年間を振り返って

学生の声

1年生

積極的な行動を目標に

中山 大基
Daiki Nakayama

大学に入って一年間がたとうとしています。最初はとても不安でしたが、すぐに友人もでき、共に学業に励む仲になれました。頼れる先輩や尊敬できる先生に会うこともできて良いスタートを切ることができました。

大学の授業に慣れるのは時間がかかりました。普段の生活でもパソコンを使用していますが、授業で使うとなると苦労する点が多かったです。キーボードを叩くスピードが遅く、文章を打つのに時間がかかっていました。しかし学科主催の補習に参加することで、今では手元を見ないで打てるようになりました。

毎回の授業の出席は当たり前ですが、それが結構難しいものなのです。そこに課題や試験が加わると慌ててしまいます。明日やるからいいと怠け癖がつき、集中できないこともありました。何事も計画を立てて、地道にやることが大切だと思い知りました。時間がいくらあってもやらないのはもったいない。明日やるのではなく今日やる。これが実行出来なければ、この先もがんばることはできないと悟りました。

行事で一番印象に残ったのは大学祭です。みんなが懸命に作業をする様はとても美しかったです。サークルの展示の作業を手伝いましたが、上手く働くことができず自分の不甲斐なさを知りました。既に大学祭を経験して手慣れているの先輩たちの姿を見て頼もしく思いました。いつか自分も後輩を助けられる先輩になりたいと思います。

一年間の反省は、あらゆる活動において消極的だったことです。積極的に行動すれば多くの人と出会え、経験にもなったはずです。また、授業でのレポートにも苦労しました。テーマに関して理解があれば書くのは容易いことですが、理解が不十分な上、自分が主張したいことを表現できず、むりやり押し通すようにレポートを仕上げてしまいました。この姿勢は普段の生活でもでてしまい、これではいけないと反省しています。

この１年間の大学生活は、これまでに体験したことがないことがたくさんあって、興味深いものでした。新学期からも悔いのない大学生活を送りたいと思っています。

塙保己一史料館 体験学習

平成１９年８月５日に社団法人温古学会塙保己一史料館（東京都渋谷区）で行われた体験学習「江戸時代の版木を摺ってみよう」に、４年生２名と３年生３名で参加しました。江戸時代の版木を用いて、摺りに挑戦。なかなかきれいにすることができず、江戸時代の職人の技のみごとさを再認識しました。重要文化財の群書類従の版木を納めた庫内も見学させていただき、感激しました。

「実際に版木を擦ってみると、上手く擦れる時もあれば、そうでないときもあり、思いどおりにはいきませんでしたが、自分で擦った物には愛着が湧き大切にとってあります。今回、版本を擦るという貴重な体験が出来て良かったです」（大石美穂）

版木摺りに苦戦

清野 真理子

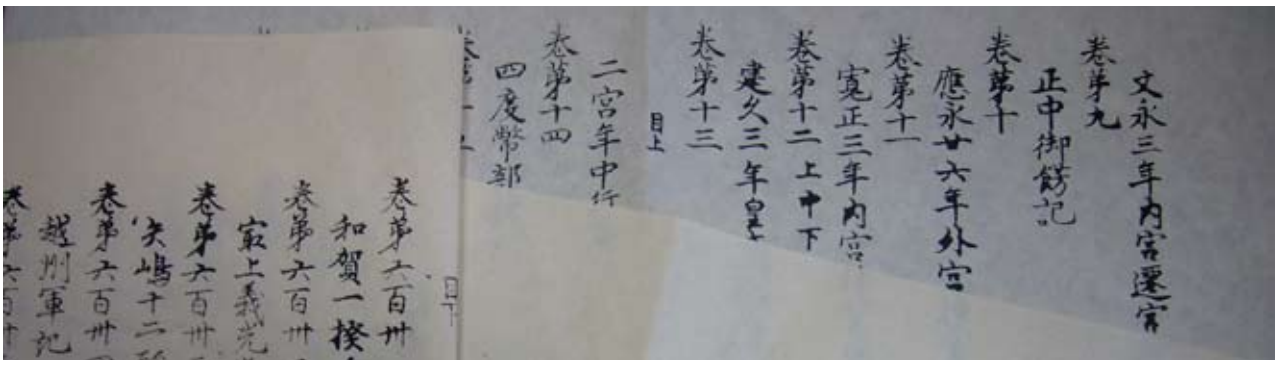
（写真左）Mariko Kiyono

塙保己一史料館では、江戸時代よりおよそ２万枚もの群書類従（塙保己一 1746-1821 編・目録 1 冊・530 巻 665 冊からなる叢書）等の版木が保存されています。版木倉庫へ行き、大変貴重なものを間近で見させて頂きました。

まず、倉庫の暑さに驚いてしまいました。真夏であったこともあるのですが、版木保存の為に、部屋の室温、湿度は常に高く保たれているそうです。

そして版木を刷る体験もしました。授業で古い版本を手にとって見る機会はあるのですが、実際に江戸時代の版木で刷るとなると、想像していたよりもずっと難しく、苦戦しました。墨を付けすぎたり、力加減を少しでも変えてしまうとすぐに滲んでしまいます。また、版木の文字の摩滅が激しい部分は思うように紙に写りません。この作業を繰り返すことによって一冊の本にするということは、大変な技術、労力を要することなのです。古典籍に対する見方が少し変わりました。

自分で刷ったもの（写真下）は記念として持ち帰りました。当日は小学生も参加する中、私達もとても楽しく学ぶことができました。



（後列左から）熊谷純貴・良岡淳一郎・井上雄貴・宮川太陽・浅谷紘太（中列左から）塙洋輔・金田真奈・井上文乃
矢野佳奈子・鈴木可南子（前列左から）荒木俊之・大石美穂・野中文菜・豊部祥子・森谷奈保子

ドキュメンテーション学科では「特別実習」という授業の中でインターンシップを実施しています。平成１９年度のインターンシップに参加した学生は１５名。以下の１４社の企業（五十音順・括弧内は実習生）にご協力いただき、大学での勉強とは違った貴重な経験をしてきました。ご協力に感謝したします。

株式会社ＩＨＩ［森谷奈保子］
株式会社オンワード樫山［野中 文菜］
キャッツ株式会社［荒木 俊之］
ＪＦＥテクノリサーチ株式会社［矢野佳奈子］
株式会社樹村房［金田 真奈］
株式会社ソフテム［井上 雄貴］
株式会社ビジョンメガネ［塙　洋輔］
株式会社一蔵［大石 美穂］
株式会社紀伊國屋書店［熊谷 純貴・良岡淳一郎］
株式会社コスモス［宮川 太陽］
株式会社志正堂［井上 文乃］
スガツネ工業株式会社［豊部 祥子］
株式会社西田書店［鈴木可南子］
株式会社プリンスホテル［浅谷 紘太］

今回インターンシップに参加した学生たちは、昨年度の報告会後、事前レポートの提出、事前面談、事前調査書の提出、５月・６月の事前指導、夏休み中の２週間にわたる実習、さらに、報告会実施に向けて事後指導と、１年間にわたりいくつものハードルを越えてこの日の報告会を迎えました。そして１０月２９日には、学生を受け入れてくださった企業の担当者を招待して、報告会を開催しました。各学生のプレゼンテーションには、この１年間の努力のあとを確かに見ることができました。ぜひとも、今後の学業に、就職活動に今回の貴重な体験を生かしてもらいたいと思います。（p14-p15 に実習後の学生の感想を掲載）

インターンシップの報告

平成 19（2007）年度

株式会社ソフテム　井上 雄貴

お世話になった株式会社ソフテムでは実習生に社員の方々と同じような業務を体験させていただきました。そのため、実習を受ける目的の１つであった「実際に社会に出て働くとはどういうことなのか」に対する答えを得ることができました。３週間の業務体験はあっという間に過ぎて行きましたが、中でも印象的だったのがプレゼンテーションでした。大学講義でプレゼンテーションをすることは何度か機会がありましたが、実際の業務の中でするそれはまったく別のものでした。自分の受け持った仕事をこなすとともに、相手に伝わるように説明することの大切さを学びました。

株式会社樹村房　金田 真奈

私がインターンシップに参加した理由は、実際に社会で働いてみることで、仕事をするとはどのようなことなのかを学べると考えたからです。実習期間中は、倉庫整理や倉庫の本を磨く作業を中心に、校正作業や本の流通センターの見学、パソコンを使ったデータ入力作業などを行いました。実習の間は間近で仕事の現場や働く人の様子を見ることができ、またいろいろなお話も伺えたので、働くことに対してのイメージが今までよりも具体的になりました。そして、体力を使う仕事からデスクワークまで多様な仕事を経験できたので、自分に向いている働き方や仕事内容について、改めて考えてみるよい機会になったと思います。

株式会社オンワード樫山　野中 文菜

今回の実習では実際に店舗に立たせていただき、販売員としてのお仕事をさせていただきました。お客様と直接接する仕事なのでとても緊張しましたが、その分勉強になることが多く、様々なことを学び、吸収する毎日でした。今回の実習を通してもっとも感じたことは、笑顔の大切さでした。お客様から自然と出される笑顔から元気をもらい､私も自然と笑顔になることができたと思います｡迷惑をかけてしまったこともありましたが、色々なお仕事をさせていただくことで自信に繋がり、自分を成長させたいという目的を少し達成できたと思います。

株式会社ビジョンメガネ　塙　洋輔

店舗実習の当初は何をすべきか分からず、ぎこちなく、社員の方々の仕事をただ見ているだけという感じでしたが、少しずつ自分から何をすれば良いか考え、わからないことは社員の方々に聞くようにして、仕事にも慣れていきました。実習中、お客様のご用件を聞き間違え不愉快な思いをさせてしまったことがありました。自分の思い込みで行動することの危なさを実感し、しっかりと話を聞き、それにあった対応をすることが何より大事であると思いました。そして、その日その日に学んだことを書き留めておき、同じ失敗をしないよう次に生かしていくことの大切さを感じました。

ＪＦＥテクノリサーチ株式会社（技術情報事業部・図書情報センター）　矢野 佳奈子

大学で学んできたことを生かし、自分の能力を知り伸ばしていきたいと考えていたので、図書登録作業や文献データベースでの検索はなど、企業の図書館での研修はとても勉強になりました。特に私はデータベースに興味を持っていたので、ＳＴＮやＪＤ ream Ⅱを触らせていただけたことや、図書の装備から配架までの流れを通して体験し、その本が利用されているのを見て、とてもうれしく、やり終えた達成感と仕事への責任感が強くなったと思います。しかし、自分でやった仕事に対して、確認が甘くデータが反映されなかったり、反省点もあります。実習を経験し、あたらためて将来について考え図書館や情報への関心が深まりました。

スガツネ工業株式会社　豊部 祥子

「営業」というアルバイトではなかなか体験することができない業務を経験する良い機会と思いインターンシップに参加しました。自分に何が出来るのか、試してみたいというチャレンジ精神をもって挑みました。同行させていただいた担当の方から営業の醍醐味や難しさ、お客様に満足していただくために何が大切なのかを学び、自分の中にあった「営業」という職業に以前よりしっかりしたビジョンを持てるようになりました。「社会人になる」と言う事についてもアドヴァイスを色々といただき、就職活動の第一歩として背中を押していただいた心地でした。インターンシップは自分の見解を広げるとてもいいチャンスだと思います。

株式会社志正堂　井上 文乃

株式会社志正堂は文具の卸売の会社です。実習では物流センターや印刷所での実習、営業同行をしました。２週間の実習を通して様々な仕事や職場を見る事ができ、仕事に対する考え方も変わりましたし、コミュニケーションの大切さや、疑問を持つ事の大切さ等、本当にいろいろなことを学ぶ事ができました。そして、一番インターンシップに参加してよかったと思ったことは、他大学の学生や実際に様々な現場で働く方々など普段話をする事のない立場の方と話しをする機会が得られたことです。自分では思いつかないような考え方や意見に触れることで、自分の自分の事を改めて考え直す事もでき、視野を大きく広げる事ができた２週間でした。

株式会社プリンスホテル　浅谷 紘太

ホテル業というのは人間を相手に仕事する業務なので本当に大変でした。しかし、その分常に誰かに見られているという意識もあり、自然と基本的な挨拶、言葉遣い、マナー等が身につき、お客様にしっかりとしたサービスを行うことができるようになったと思います。こうしたことは初めから出来た訳ではなく、やはり毎日の積み重ねで出来るようになったと思います。初めは参加するのも迷っていましたが、実習後の今振り返ってみるとプラスになることばかりで、インターンシップに参加して良かったと思います。

平成19（2007）年7月–20（2008）2月

ドキュメンテーション学科・学会活動報告

８月５日（日）

塙保己一史料館の体験学習に参加

社団法人温古学会塙保己一記念館で行われた体験学習「江戸時代の版木を摺ってみよう」に、４年生２名と３年生３名で参加しました。（p12）

９月１日（土）

司書・司書補夏期講習共催
第５回鶴見大学デジタルライブラリー
国際セミナーを開催

台湾から国立台湾師範大学図書資料学研究所の所長Mei-Mei Wu 教授をお招きし、「図書館員のための情報リテラシー教育」の講演会を開催しました。

講演会には、司書･司書補講習の受講生および卒業生、ドキュメンテーション学科の学生、学外からの参加者など 200 名を超える参加者がありました。台湾や欧米での情報リテラシー教育の実態の紹介後、参加者を５、６名のグループに分け、情報リテラシー教育を推進するためにどのようなことが企画できるかを議論しました。その後、柳澤学長の抽選により、５つのグループが選抜され、そのグループの代表者が発表しました。参加者からは講演を聞くだけでなく、自分たちで積極的に考える機会が与えられ、有益であったとの意見が多くありました。

１０月２９日（月）

インターンシップ報告会を開催

学生たちを受け入れて下さった企業の担当者の方々をお招きし、平成１９年度インターンシップ報告会を開催しました。（p13-15）

２月６日（水）

神奈川新聞社・テレビ神奈川を見学

１年生を中心に、神奈川新聞社・テレビ神奈川へ見学会へ行きました。０６年２月以来２度目の訪問です。神奈川新聞社では紙面レイアウトの体験を、テレビ神奈川ではスタジオや副調整室などを紹介していただきました。

２月２５日（月）・２月２６日（火）

卒業生がノートＰＣを返却

入学時に貸与されたノートＰＣを卒業生が返却しました。ともに４年間を過し、卒業論文を仕上げた、愛機との「別れ」を名残惜しんでいました。

※活動報告の詳細は学科ホームページ（http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/docu/documentation/home.html）でご覧になれます。

■第７号は７月末の発行の予定です。原稿・写真を募集しています。編集委員へお問い合せ下さい。

■ 編集委員
〔学生〕水島（1年）　康・山内悠加
〔教員〕岡田　靖・伊倉史人

ドキュメンテーション　第６号
平成２０（2008）年３月 14 日（金）
鶴見大学文学部ドキュメンテーション学会
横浜市鶴見区鶴見 2-1-3（〒 230-8501）
☎ 045(581)1001（代表）発行責任者：長塚 隆
http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/seminar/docu/documentation/home.html